opusdei.org

# 新たなる〈地中海〉 (I): :神の子のあの最 初の祈り

神の子であるという感覚は、 すべてを変える。それは思い がけなくこの新たな地中海を 発見した聖ホセマリの生活を 変えたように。

2020/06/03

# 1.「神の子の最初の祈り」

初代キリスト者たちのうちに最も深く根づいていた確信のひとつは、自

分たちは愛されている子として神に 呼びかけることができるということ でした。イエス自身が彼らにこう教 えていたのです、「あなたたちはこ う祈りなさい、《天におられる私た ちの父よ……》| (マタイ6・9)。 イエスはユダヤ人たちに、自分は父 なる神に愛されている子であると言 い、弟子たちにも自分と同じように しなさいと教えていました。使徒た ちはイエスが、ヘブライ人の子ども たちが父親に呼びかけるときに使う 言葉でもって、神に呼びかけている のを耳にしていました。聖霊を受け た後、彼らも同じ言葉を使い始めた のです。イスラエルの信仰に対し て、これはまったく新しいことでし たが、聖パウロはこれについて、誰 もが知っている当然のことのように 言及しています。「あなたがたは、 神の子とする霊を受けたのです。こ の霊によってわたしたちは《アッ バ、父よ!》と呼ぶのです。この霊 こそは、わたしたちが神の子供であ

ることを、わたしたちの霊と一緒に なって証ししてくださいます| (ローマ8・15-16)。この確信ゆえ に、初代キリスト者たちは信頼に満 たされ、思いもよらぬほど大胆にこ う言うことができたのです、「もし 子供であれば、相続人でもありま す。神の相続人、しかもキリストと 共同の相続人です| (ローマ8・ 17)。イエスは神の独り子であるだ けではなく、多くの兄弟の中の長子 でもあるのです(ローマ8・29、コ ロサイ1・15参照)。キリストに よってもたらされた新たな命は、初 代キリスト者たちに、神に愛されて いる子の命として示されたのでし た。これは理論上の真理とか抽象的 な真理とかではなく、現実のことと して、あふれるほどの喜びで彼らを 満たしていたのです。そのことは、 使徒聖ヨハネが第一の手紙でこう高 らかに叫んでいることからも明らか です。

「御父おんちちがどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい。それは、わたしたちが神の子と呼ばれるほどで、事実また、そのとおりです」(1ヨハネ3・1)。

神はわたしたち一人ひとりをたとえ ようもないほど優しく愛してくださ る父であるということは、キリスト 者なら子どもの頃から教えられてき たことです。けれどもわたしたち は、そのことを個人的に生き生きと した仕方で発見し直し、神との関係 を新たにするよう招かれているので す。そうすると、わたしたちの目の 前に開けてくるのです、平和と信頼 に満ちた〈地中海〉が、わたしたち が全生涯を通じて深めてゆくことが できる新たな地平が。聖ホセマリア にとって、それは思いもよらない発 見でした、すでによく知っていたこ とのうちに隠されていたパノラマが 不意に開けてきたのです。1931年の 秋のことで、聖ホセマリアは何年も

たった後、そのことを思い出しなが らこう語っています。「話してあげ ましょう、いつ、どんなとき、どこ で、わたしが神の子としての最初の 祈りを唱えることになったかを。子 どもの頃から主の祈りで神を父と呼 ぶことは教わっていました。けれど も、神のあのご計画を、わたしたち をご自分の子にしようというご計画 を、実際に感じ取り、見て、感嘆し たのです……街で、路面電車の中 で、1時間、いや1時間半だった か、《アッバ、父よ!》と叫ばずに はいられませんでした」[1]。

それから何ヶ月ものあいだ、聖ホセマリアはこのことを何度も振り返っています。1年後に行った黙想のとき、たとえば彼はこう書き記しています。「1日目。神は私の父だ。——この考えから離れることがであるない」[2]。一日中、神が父であることを考えて過ごす!これほど長いたいたで神について観想し続けていたこ

とに最初は驚くほかありませんが、 実際にこのことが示しているのは、 神との親子関係という経験がそれほ ど深く彼の心に根づいていたという ことです。わたしたちもまた、祈る ときに、あるいは心を神に向けると きに、まず信頼と感謝を込めて神に 身を委ねることを心がけるべきで しょう。しかし、わたしたちと神と の関係が実際にこのようになるため には、神がほんとうにわたしたちの 父となることを望まれたということ を、改めて個人的に発見する必要が あります。

#### 神はわたしにとって誰なのか?

聖ホセマリアのように、わたしたちもきっと神は父であると子どもの頃から教わっているのでしょうが、わたしたちが神の子としての身分を徹底して生きるためには、まだまだ長い道のりを歩む必要があるでしょ

う。そのことを発見するにはどうす ればよいのでしょう?

第一に、神が父であることを発見す るためには、神のイメージを正しく とらえ直す必要があります。自覚し ているか否かはともかく、神のこと を、掟を課しそれを守らない者に対 しては罰を下す方のように考える人 たちがいます。自分の意志に従うよ う望み、それに逆らえば怒るような 方、つまり、わたしたちが意に反し てでも従うほかない主人のような方 だと。あるいはまた、一部のキリス ト信者も含め、わたしたちが正しく 振る舞うのは神がいるからだと考え る人たちもいます。神がいるからわ たしたちは、本当は行きたくないと ころに行かねばならないのだ、とで も言うかのようです。けれども、神 は「私たちの父であって、独裁的な 支配者でも、厳格で無慈悲な裁判官 でもありません。私たちの寛大さに 欠けた態度や罪や誤ちを指摘なさい

ます。しかしそうなさるのは、罪や 誤ちから私たちを解放し、私たちを 神の友情と愛にふさわしいものとす るためなのです」[3]。

「神は愛」(1ヨハネ4・8)である ことを理解するのが難しいのは、さ まざまな国で父性が危機に瀕してい るからかもしれません。多分わたし たちは、友だちや同僚との話を通じ て、そう感じているでしょう――彼 らは父親に対して良い思い出をもっ ていないので、神は父であるといっ てもとくに魅力を感じないのです。 だから、彼らと信仰について話すと きには、彼らに示してやれると良い でしょう、この愛情の欠如から生じ る苦しみがどれほど深く心に根ざし たものであるかを、彼らがどれほど 父を必要とし求めているかを、そし て彼らに先立って存在し彼らを呼び 求めている父がいるということを。 友や司祭は、彼らに寄り添いつつ、

「天と地にあるすべての家族がその

名を与えられている御父」(エフェ ソ3・14-15) の愛を発見できるよう に、また、すべての人の心に脈打つ 召命――すでに父親や母親になって いる彼らの、あるいはいつかそうな ることを望んでいる彼らの進むべき 道でもある――あの「守護者として の召命」[4]のうちにある愛情を経験 できるように、助けることができる のです。そうして彼らは、心底か ら、神の正しいみ顔を発見すること ができるでしょうし、神の子として ――神の深い愛に見守られている者 として――どのように生きていけば よいのかを知ることができるでしょ う。なぜなら、父が子を愛するの は、子が何をするかによってでも、 何をやり遂げたかによってでもな く、ただ子であるからなのです。父 は子を世に送り出し、その子のもつ 最良のものを引き出そうとします が、その子が自分にとって大切な存 在であることを忘れたりすることは 決してありません。

このように考えることは、わたした ちにとって助けとなることです、と くに失敗したとき、あるいは自分の 生きている世界が示すモデルと実際 の自分とがかけ離れているため、自 分がつまらない人間のように思えた りするときに、助けとなります。 「これこそがわたしたちの《身の **丈**》であり、霊的なアイデンティ ティです。いつだってわたしたち は、神の愛しい子どもなのです。 (···) 憂鬱で悲観的に生きること は、自分の本当のアイデンティティ を認めないことを意味します。それ は、神がわたしを見つめようとして おられるときに反対側に回り込ん で、神がわたしに対して抱いている 夢を台なしにするようなものです。 神はわたしたちのありのままの姿を 愛しておられ、どんな罪も失敗も過 ちも、み心を変えることはできませ

ん」[5]。

神は父であると悟ることは、愛され ている子のように、神に見つめられ るままでいることでもあります。そ うやってわたしたちは理解するので す、わたしたちの価値は、わたした ちがもっているもの――たとえば才 能――によるのでも、わたしたちが すること――たとえば成功――によ るのでもなくて、わたしたちを造ら れた愛である神、わたしたちを思 い、「天地創造の前に」(エフェソ 1・4) わたしたちを選ばれた神によ るのだということを。現代世界がと きとして抱いている神についての冷 ややかな思いに対して、ベネディク ト十六世は教皇に就任したそのとき に、こう指摘しています。「わたし たちは、進化の結果、偶然に生まれ た、無意味な産物のようなものでは ありません。わたしたち一人ひとり は、神のはからいに基づいて生まれ たのです。わたしたち一人ひとり は、神から望まれ、愛され、必要と されています」[6]。このことを、わ たしたちは日々考えているでしょう か?

# 神の子としての信頼に基づく希望

聖ホセマリアはオプス・デイのメンバーたちに、「わたしたちの霊的生活の基本は神との親子関係の自覚にあります」[7]としばしば指摘していました。聖ホセマリアはこれを「素敵な首飾りの真珠をつないでいる糸」に喩えてこう言っています。

「神との親子関係は、すべての徳を結びつける糸なのです、すべての徳は神の子の徳なのですから」[8]。だからこそ、わたしたちの霊的生活全体を支え作り上げてくれるこの《新たなる地中海》を発見させてくださるよう神に願うことが、決定的に重要になってくるのです。

神との親子関係という糸は、「希望ある委託」[9]となって――子どものような、とくに幼子のような態度となって――現れます。だから、聖ホ

自分が神の子であると知ることは、神から委ねられた使命を果たすしたもまたしたものです。わたどれるものです。わたどう日、マタイ21・は父親から「子なさい」(マタイ21・28)と言われたあの息子と同初はまな気持ちになるでしょう。最初ざませなったり、あるいもしれるでとを考えてしまうかもしれるでん。しかしすぐに、それを頼んでい

るのはわたしたちの父であり、父が わたしたちに深い信頼を寄せてくれ ていると気付くでしょう。キリスト のように、わたしたちも父の手にす べてを委ね、「わたしが願うことで はなく、御心に適うことが行われま すように (マルコ14・36) と心か ら言えるようになろうとするでしょ う。聖ホセマリアはその生涯を通じ てわたしたちに、キリストにならっ てそのように振る舞うよう教えてく れました。「この喜ばしい神との父 子関係に私はたえず支えを求めてき ました。どのような事情のもとで あっても、時によって色あいこそち がえ、いつも神に申しあげたもので す。主よ、私をこのような場にお き、あれこれと仕事をお任せになっ たのは御身です。御身を深く信頼い たします。御身が私の父であらせら れることはよく承知しております、 と。子供たちが父親に全幅の信頼を 寄せる様子をいくどとなく目にして きました | [10]。

確かに、困難はあるでしょう。けれ どもわたしたちは、あの全能の父が わたしたちのそばにいて、わたした ちの味方となってくださると確信 し、何が起ころうとわたしたちを見 守っていてくださると信じつつ、困 難に立ち向かうのです。神はわたし たちの計画をうまく導いてくださる でしょう、結局のところ、その計画 は神のものなのですから。ことに よったら、神は別のなさり方をする かもしれませんが、そのときはもっ と実りあるものにしてくださるで しょう。「あなた自身を嘘偽りなく 主に委ねれば、何が起こっても満足 していることができるだろうし、た とえ努力を傾け必要な手を打ったに もかかわらず、望みどおりに事が運 ばなかったとしても、落ち着きを失 うことはあるまい。神のお望み通り に〈事が運んだ〉からである|  $[11]_{\circ}$ 

### 神との親子関係の自覚を養う

注意すべきことは、聖ホセマリアが オプス・デイの精神の基盤として教 えていたのは、神との親子関係では なく、神との親子関係の自覚であっ たということです。神の子であるだ けでは十分ではありません、わたし たちは自分が神の子であると知らね ばなりませんし、その自覚がわたし たちの生活にしっかりと根を下ろす 必要があるのです。その確信を心に 抱くこと、それが最も堅固な基盤と なるのです。そのとき、わたしたち は神と親子の関係にあるという真理 は、わたしたちの生活にはっきりと した影響を及ぼすよう働くことにな るでしょう。

この自覚を養うためには、頭と心でもってその現実に深く入り込むとよいでしょう。まず、頭でもって、祈りのうちに、神はわたしたちの父であり、わたしたちは神の子であることについて、神の子の生活について語っている聖書の箇所を黙想するこ

とです。また、わたしたちの神の子として身分について聖ホセマリアが書いている多くの文章[12]や、他の聖人たちやキリスト教作家たちの考察[13]も、この黙想に光りを与えてくれるでしょう。

また、心でもって、わたしたちは神 の子であることについて思いを深め ることができるでしょう、信頼を もって神のもとに馳せよることに よって、神の愛に身を委ねることに よって、言葉でもってあるいは黙っ たまま子としての姿勢を日々新たに することによって、神がわたしたち に対して抱いておられる愛をつねに 思い浮かべることによって。そのた めの良い方法として、短い祈りや射 祷でもって神に向かうことがあげら れます。聖ホセマリアは次のように 勧めています。「何度も心の中で、 父よ、と呼びかけたいものです。心 の中で主に申し上げましょう。御身 に愛をささげ、御身を礼拝します、

御身の子であることに誇りを感じ、 ちからを得ることができます、と| [14]。わたしたちはいくつかの祈り を唱えることもできます、神の子で あることを支えとしながら日々の務 めを良くはたすことができるよう に、あるいは感謝と痛悔と希望のう ちに一日を終えることができるよう にするためです。フランシスコ教皇 は若者たちに次のような祈りを勧め ています。「《主よ、わたしを愛し てくださり、ありがとうございま す。あなたがわたしを愛してくださ ると確信しています。わたしが自分 の人生を愛せるよう助けてくださ い》。直すべき欠点ばかりに目を向 けるのではなく、偉大なたまもので あるいのちを愛することです。今こ の時こそ、愛し、愛される時だから です | [15]。

#### 父の家に帰る

同様に、自分が神の子であると感じ ることによって、わたしたちは安心 して神のもとに帰ることができるよ うになります、疲れたとき、ひどい 目に遭わされたとき、傷つけられた とき…… そしてまた神に背いたとき も。父のもとに帰るということは、 あの「すべてを委ね希望する」態度 のもうひとつの表し方です。聖ルカ が語る二人の息子をもつ父親のたと え話(ルカ15・11-32)をしばしば 黙想するとよいでしょう。「私たち にはそんなにしていただく値打ちは

ないのですが、放蕩息子の父のよう に、神が大喜びで迎え入れて下さる のです。心をうちあけて御父の家を なつかしく思慕するだけでよいので す。恩知らずの私たちであるのに本 当に御自分の子にして下さった神の 賜物に驚き喜びさえすればよいので す」[17]。たぶんこの息子は、自分 が父に与えた苦しみについてはほと んど考えなかったでしょう、彼には 父の家での豊かな暮らしがなにより も懐かしかったのです(ルカ15・ 17-19)。彼は父の家に帰る決心を します、大勢いる雇い人の一人にし かなれなくともかまわないと思っ て。ところが父は彼を迎え入れま す。自分から息子を迎えに出て行 き、首を抱き、優しく接吻するので す、そうやって彼の根源的アイデン ティティーを思い出させるてやるの です、おまえはわたしの子なのだ と。父はすぐさま息子のために服や 履き物や指輪などをもってこさせま す、それは親子の関係を示すもので

あり、その関係はたとえ息子が大きな過ちを犯そうとも解消されることはないのです。「ともかくわが子のことで、どんなふるまいによってもこの間がらはなくしたり、解消したりはできないことでした」[18]。

ときとしてわたしたちは神のこと を、わたしたちを召使いとして使う 主人にように、あるいは冷酷な裁判 官のように思ってしまうかもしれま せん、それでも神は父としての愛に 忠実な方であるのです。わたしたち が過ちを犯したあとも神に近づくこ とができるということは、神を見出 すための素晴らしい機会となるもの です。同時にそれは、わたしたち自 身のアイデンティティーを明らかに してくれることでもあります。神が わたしたちを愛してくださるのは、 神がそう決められたからというだけ ではなく、恵みによってわたしたち をほんとうに神の子としてくださっ たからなのです。わたしたちは神の

#### ただひたすら愛する

神との親子関係の自覚はすべてを変えます、まさに聖ホセマリアがこの新たなる〈地中海〉を不意に発見したとき、それが彼の人生を変えたように。わたしたちの内的生活も、その基盤を自分の進歩や決心に置くのではなく、わたしたちに先立って存在し、わたしたちを待っていてくだ

さる愛なる方を中心に据えることではいるできることを優先することを優先することを優先のことを優先人といるといるというははいいったといるととを優れているととを受けないでは、にもいったというはいかにはいかにはいったがはいかにはいったがあるです。

日々神の愛を受け入れようと望む者 には敗北はありません。たとえ罪を 犯したとしても、父なる神のもとに 帰るなら――「わが子よ、わが子 よ!| と叫びながらわたしたちを出 迎えてくれる「父」のもとに帰るな らーー、わたしたちのアイデンティ ティーを思い出させてくれる機会と なるでしょう。そう自覚することに よって、聖ホセマリアが言うよう に、再び主に従って歩んでいくため の力が生まれてくるのです。「恩寵 の光りと恩寵の助けによって、何を 焼き尽くすべきか、何を引き抜くべ きかをみきわめ、全て焼き尽くして 捨てねばなりません。まだ主に差し 上げていないものは何かをみきわ め、未練を残さず捧げ尽くさねばな らないのです」[20]。ただし、重荷 と感じたり落胆したりすることな く、そうするのです、キリスト者と しての生活の理想と完全主義とを混 同しないよう心がけながら[21]。そ のようにしてわたしたちは、神がわ

たしたちに対して抱いておられる愛を心に留めながら、ただひたすら愛しながら、生きていくのです。父の愛を少しずつ発見してきた子どものように、感謝の気持ちをいろいるな形で表したいと願いつつ、精いっ愛を込めて父の愛に応えようとする子どものように。

[1] San Josemaría, Meditación del 24-XII-1969 (en A. Vázquez de Prada, El Fundador del Opus Dei, vol. 1, Rialp, Madrid 1997, p. 390).

[2] San Josemaría, Apuntes íntimos, n. 1637 (en A. Vázquez de Prada, El Fundador del Opus Dei, vol. 1, p. 465).

[3] 『知識の香』64〔前掲邦訳、149 ページ〕。

- [4] 教皇フランシスコ、就任ミサ説教、2013年3月19日〔『教皇フランシスコ講話集1』カトリック中央協議会、ペトロ文庫、2014年、31ページ〕。
- [5] 教皇フランシスコ、説教、2016 年7月31日〔教皇フランシスコ講話 集4』カトリック中央協議会、ペト 口文庫、2017年、167-168ペー ジ〕。
- [6] 教皇ベネディクト十六世、就任 ミサ説教、2005年4月24日〔教皇ベ ネディクト十六世『霊的講話集 2005』カトリック中央協議会、ペト ロ文庫、2007年、31ページ〕。
- [7] San Josemaría, Carta 25-I-1961, n. 54 (en E. Burkhart, J. López, Vida cotidiana y santidad en la enseñanza de San Josemaría, vol. 2, Rialp, Madrid 2013, p. 20, nota 3).

- [8] San Josemaría, Apuntes de la predicación, 6-VII-1974, en E. Burkhart, J. López, Vida cotidiana y santidad en la enseñanza de San Josemaría, vol. 2, p. 108.
- [9] フェルナンド・オカリス、司牧書簡8、2017年2月14日〔邦訳は Opus Deiホームページhttps://opusdei.org/ja-jp/に掲載されている〕。
- [10] 聖ホセマリア『神の朋友』143 〔精道教育促進協会スタッフ訳、精 道教育促進協会、1985年、193ペー ジ〕。
- [11] 聖ホセマリア『拓』860〔新田 壮一郎訳、精道教育促進協会、1989 年、234ページ〕。
- [12] Cfr. p. ej. F. Ocáriz, "Filiación divina" en Diccionario de san Josemaría Escrivá de Balaguer,

Monte Carmelo, Burgos 2013, pp. 519-526.

[13] El año jubilar de la Misericordia ha permitido redescubrir a algunos de ellos. Cfr. Pontificio Consejo para la Promoción de la Nueva Evangelización, Misericordiosos como el Padre. Subsidios para el Jubileo de la Misericordia 2015-2016.

[14]『神の朋友』150〔前掲邦訳、 201ページ〕。

[15] 教皇フランシスコ、説教、2016 年7月31日〔前掲邦訳、169ペー ジ〕。

[16] 聖ヨハネ・パウロ二世、説教、 2003年5月4日。

[17]『知識の香』64〔前掲邦訳、 151ページ〕。 [18] 聖ヨハネ・パウロ二世、回勅 『いつくしみ深い神』5〔沢田和夫 訳、カトリック中央協議会、1981 年、27-28ページ〕。

[19]『知識の香』66〔前掲邦訳、 153ページ〕。

[<u>20]</u>同上〔前掲邦訳、154ペー ジ〕。

[21]フェルナンド・オカリス、司牧 書簡8、2017年2月14日。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/chichukai-1/(2025/11/22)